



企業編



スターコックス株式会社

国東町で建築業を営んでいた創業者の利行眞一さんは、昭和58年に起こった

地震で、住宅の被害状況を調べたところ、床下で土台と柱との接合部分にめり込んだ部分を発見し、この時、土台と柱の間に、緩衝材を挟み込むことを思いつきました。しかし、緩衝材に使う素材がなかなか見つかりませんでした。そのような中、国見町のゴム製造工場の建屋を建築することになり、ゴムの性質等について教えてもらうことができました。

緩衝材をゴムで作ることを決め、ゴム製造の盛んな久留米市に技術の習得に行き、杵築市にスターコックス株式会社を設立しました。ゴムの緩衝材の開発に取り組みながら、九州ゴム工業会へ加盟したことで、自動車ゴム部品の製造も受注するようになりました。平成4年に開発を行ってきた緩衝材「キソゴム」が完成し、自動車ゴム部品とキソゴムの受注が順調に増えていき、今までの工場では手狭になり、平成8年に国東町に工場を移設しました。それ以後、自動車のエンジン周りに使用される耐久性や精密性を要する部品を受注できるようになり、現在では自動車ゴム部品の製造が、会社内の6割を超える事業収入となっています。そして、昨年末からダイハツ九州株式会社から直接発注を受ける一次取引業者となりました。これは、製品の品質や生産体制が高く評価されたことによるものでした。その他の企業からも、今までよりも高い2次や3次取引ができるようになり、生産量は飛躍的に伸びてきています。さらに、今年4月に発生した熊本地震により、会社設立のきっかけになった「キソゴム」も再び脚光を浴びるようになってきています。しかし、ゴム部品の製造は、ゴムの性質上、部品の加工や検査に人手が必要で、生産増加に伴い従業員が不足している状況です。スターコックスは、これからも「品質・納期・コスト」を徹底的に追求しながら、地域に根差した企業を目指して、地元雇用に積極的に取り組んでいきます。



▲加工の様子



▲製品検査の様子



▲穴あけ作業の様子



▲製品の一覧

第一次産業編



農事組合法人 いけのうち

武蔵町池ノ内地区は、大規模農家が少なく兼業農家が多い地域でしたが、中山間直接

支払制度等を利用して、地域全体で農村環境整備に取り組んできました。平成17年の制度改正により、営農組合が農事組合法人になると多くの補助金がもらえるようになったため、地域全体で話し合った結果、手続きが簡易な営農組合を結成することを決め、平成17年11月に池ノ内営農組合を設立しました。早くも、同年に小麦を4ヘクタール作付し、大分県麦作奨励会優秀賞を受賞することができました。しかし、営農組合で活動してみると、農地の貸し借りや買い取り、農機具等の購入資金の調達方法などが、法



人の方が有利であることが分かりました。そこで、平成18年1月から、法人化に向けての協議を始めました。隣保班ごとに説明して、話し合ってもらった結果、地域全員の賛成の下で「地域の農地は地域で守る」という方針を立て、平成18年5月に農事組合法人「いけのうち」を設立しました。設立方針を守るために、荒廃田や耕作放棄地の防止や機械設備の充実、農地の有効活用に取り組みました。そうした取り組みの結果、地域内の耕作放棄地は全て法人で管理するようになり、法人管理の耕作面積は、約20ヘクタールまで拡大しました。農地の有効活用の結果、地元の方が法人の農作業に出てもらった際に、全員に時給1,500円の賃金を支払うことができました。しかし、設立から10年が経った今でも、役員が一人も交代しておらず、世代交代という課題があります。しかし、改修工事が今年完了する尻池に連動した農業競争力強化基盤整備事業の着手や、作業負担を減らすための機械化と、未来を見据えた農業基盤づくりを進めています。「いけのうちのトレッドマーク「おたまじゃくし」のように、おたまじゃくしが生息できるような環境に優しい農業、おたまじゃくしがカエルへと成長するように、今後のさらなる発展を目指して、地域全体で取り組んでいきます。



商工会編



是松米穀・生花店

安岐町塩屋 長年にわたって米穀・生花店を営む

シヨクが安岐町に進出する際に、生花店を出店しました。その後、是松三三さんは、美智代さんと結婚し、章三さんが米穀店を、美智代さんが生花店を営むようになりました。美智代さんは、お義母さんから生花店の仕事を教えてもらい、生花店を大きくするために少しずつ改善に取り組みました。まず、花を直接市場に行き仕入れるようになり、取り扱う花の種目を充実させました。平成4年に全国チェーンの「花キューピット」に加盟すると、全国から注文が来るようになり、



国東市内と杵築市の一部を担当するようになりました。また、大分県農業協同組合が行う葬祭の花も取り扱うようになると、さらに業績を伸ばしていきました。一方の米穀店は、地域の常連客のおかげで、安定した経営をしていきました。平成11年の米の自由化で、経営が厳しくなりました。そこで、平成12年にマルシヨク安岐店の店舗改修時に、生花店と米穀店を統合して、現在の店舗に移転しました。その後は、章三さんが花の仕入れや配達を、美智代さんが花束や鉢のアレンジをするようになりました。しかし、母の日や敬老の日などのギフト用の花束などの注文数は変わりませんが、日常用の花の売り上げは減ってきており、市内にあった花の小売する生花店数も5店舗からは松生花店のみになっています。そうした中、東京で花の修業をしていた息子の泰治さんが、去年からお店に加わり、美智代さんと一緒にお店を切り盛りするようになりました。今後は、泰治さんを中心に若い世代にも花に関心を持ってもらうために、国東市初の「花のアレンジメント教室」を開講し、取り扱う花の種類を充実させて、国東市を花があふれる街にしていきたいと考えています。

